

# 「向つ峰」の呪性

細川純子

「向つ峰」の呪性

はじめに

万葉集に、「向つ峰へムカツヲ」を詠んだ歌が散見する。

①花散らふこの向つ嶺(牟可都乎)の乎那の嶺の洲につくまで君が齢もがも (十四—三四四八)

(書き下しは講談社万葉集による。以下同じ)

②片岡のこの向つ峰(向峯)に椎蒔かば今年の夏の蔭に比疑へむ (七一—〇九九)

③向つ峯(向峯)に立てる桃の樹成らめやと人そ耳言く汝が情ゆめ (七一—三五六)

④向つ岡(向岳)の若楓の木下枝取り花待つい間に嘆きつるかも (七一—三五九)

⑤暇あらばなづさひ渡り向つ峯(向峯)の桜の花も折らましものを (九一—七五〇)

⑥遅速も汝をこそ待ため向つ嶺(牟可都乎)の椎の小枝の逢ひは違はじ

或る本の歌に曰はく、遅速も君をし待たむ向つ嶺の椎の小枝

の時は過ぐとも (十四—三四九三)

⑦見渡せば向つ峰の上(牟可都乎能倍)の花にはひ照りて立てるは愛しき誰が妻 (二十一—四三九七)

⑧出でて見る向ひの岡(向岡)に本繁く咲きたる花の成らずは止まじ (十一—八九三)

集中八首という数は、多いというべきか、取るに足らない数なのか、今は何とも言い難いが、妙に気になるコトバではある。賀歌と思われるものとか、願望表現とともに詠まれているのも不思議な思いがする。「向つ峰」は歌語なのだろうか、他の歌集をみてみると、日本書紀皇極紀に一個所詠まれているだけで、万葉集以後、「向つ峰」そのものは一首もない。「むかひのみね」が玉葉集二一四一番歌に詠まれており、あとは、「向いの山」と「向いの岡」がよく詠まれている。

遠方のむかひの峯は入日にてかげなる山の松ぞ暮れゆく

(玉葉 従三位親子)

隈もなく閨のおくまでさし入りぬ向ひの山をのぼる月影

(風雅 徽安門院)

夕附日むかひの岡のうす紅葉まだきさびしき秋の色かな

(玉葉 定家)

右には、万葉歌に認められる直截な祈りの表現は認められず、窓外の景は、むしろ、貴族の生活様式が生み出した構図かと思われる。特に、定家によって選ばれた「向い側」の景は、定家の詩情の原型的イメージの一つと思われる。「向い」の語句がなくても次の歌は、向い側の峰を詠んでいて、白眉である。

春の夜の夢の浮橋とだえして嶺にわかるよよこ雲の空

向い側の山や峰は、定家に至って詩的表象に結晶したように思われるが、その構図の深層に、万葉びとが「向つ峰」に対面するところが引き継がれているのかもしれない。しかし、歌学的な意味での歌語として引継がれていったのではないようである。

ムカツヲの意味として、時代別国語大辞典(上代篇)のムカの項に「形状言。我より前面に対すること。対面にあること。」とあり、例として「武智さくる沓岐のわたりを」(継体紀)「見渡せば牟可つ峯への花にほひ」(万葉四三九七)をあげている。「考」の項には、「向股や向騰などでは、脚の、他のものに向っている面をムカといったものか。|| さくる・|| つ国・|| つを・|| ばき・|| ぶす・|| ひめ・|| め・|| もも」とある。同辞典の「ツ」の項では、助詞「体言(形容詞語幹を含む)と体言とを結合し、連体修飾の関係を示す。その修飾関係は、ほぼ、下の体言の属する場所、あるいはその性情・資格を表わす。」とあり、「考」に「その連体関係の意味は、①場所を示すものと、②性情・資格を示すものがあり、形容詞語幹を体言に結ぶものは、その②に属する。しかし、必ずしも、①②は明確にはわけ切れない。場所的規定といっても、場所自らの性質

によって、属性内容的な修飾へ移るからである」とある。ツは体言である。形状言とは形容詞の旧名ということであり、ムカはその形容詞の語幹と考えてよいのだろうか。ツは②の性情・資格を示すということだから、ムカツヲは、単にムカヒの山というような場所的用語ではなく、ツがムカヒに在るということの重大な意味を担っていると考えられる。ムカの文法的所属は未だ不明のコトバであるが、動詞ムク・ムカフとも同族のコトバとして扱っていくことにする。

一 ムカを語基とするコトバ

(1) ムカヒメ・ムカツ国・ムカサクル

へムカヒメ

a 庚申年の秋八月の癸丑の朔戊辰に、天皇、正妃を立てむとす。

(神武即位前紀)

b 「前の正妃億計天皇の女橘仲皇女を立てて皇后とせむ」とのたまふ。

(宣化紀元年)

c 故、其の八上比売をば率て来ましつれども、其の嫡妻須世理毘

売を畏みて、其の生める子をば、木の俣に刺し挟みて返りき。

(古事記 上卷)

d 其の玉を將ち来て、床の辺に置けば、即ち美麗しき嬢子に化

き。仍りて婚ひして嫡妻と為き。

(古事記 中卷)

現代の訓みではムカヒめなのかムカヒめなのかを判然とさせていないが、私記丙本にはこの個所に(正妃牟加女)と訓してあるということである。ムカツヲのムカと同語と仮定し、ムカヒめとして、a

くdの女たちの事蹟を少し眺めてみよう。

aの正妃は媛蹈躰五十鈴媛命で、大三輪の神の子の一人といい、又、事代主神と三島の溝織姫（別名玉櫛姫）の間の子といい、こちらの系統の伝承が多い。事代主神のコトシロは、神憑りして託宣を伝えるものの謂らしい。コトは事であり、言でもある。シリは領すること、物のすみずみまで自分のものとするところから転じて、知ることの意を表わす語であるから、コトシリは、神の言を伝えて、現世の事（行為）を左右するという（古典大系日本書紀上補注）。母の玉櫛姫の事蹟は明らかではないが、タマガシからして、託宣に係がある。その子供であるから、神の仲立ちをする能力があったという想像も、可能ではないだろうか。媛蹈躰五十鈴媛命は、古事記では、伊須気余理比売と呼ばれ、伊須気余理比売は天皇の死後、継子の当芸志美美命と結婚したが、その当芸志美美命は異母弟（つまり、伊須気余理比売の実子）を殺そうとする。その時、伊須気余理比売はウタで三人の子に危機を知らせる。このあたりに、コトバを操る性格を認めることができる。正妃となるものは、神の仲立ちの資格を有するのではなかったか。だから、天皇たりとも、畏怖し、尊敬せざるを得ないのである。磐姫の嫉妬に対し、仁徳天皇が、なぜ、あのように恐縮し、下手に出るのか。正妃が、もともと神の仲立ちという地位にあるからである。磐姫は三綱柏を取りに出かけているし、神功皇后は、自ら神主となり先の日に天皇に託宣した神の名を問うている。

cの須世理毘売は、父須佐之男命の命により大国主命の嫡になるのであるが、大国主命の妻になる以前に、領巾を用いる呪術を用い、大穴牟遲神と呼ばれていた頃の大国主を救う。大国主命の嫡に

なるや、嫉妬の強さを表わし、磐姫に通じるところがある。

dは、天之日矛が新羅国の沼のほとりに昼寝していた女が生んだ赤玉を乞い求め、床の辺に置いたところ麗しい娘となり、それを嫡妻としたとある。その娘は「常に種々の珍珠を設けて、恒に夫に食はしめた」とある。その奉仕に心奪った天之日矛が妻を冒した時、「凡そ吾は、汝の妻となるべき女に非ず」と言って逃げ帰った。この娘の生誕のあり方も、妻になってからのワザにも、呪力の存在を認めることができる。<sup>(1)</sup>

へムカツ国

時に、神有して、皇后に託りて誨へまつりて曰はく、「天皇、何ぞ熊襲の服はざることを憂へたまふ。是、臂突の空国ぞ。

豈、兵を挙げて伐つに足らむや。玆の国に愈りて宝有る国、譬へば処女の睨の如くにして、津に向へる国（原文 向津国）有り。眼炎く金・銀・彩色、多に其の国に在り。是を栲衾新羅国と謂ふ。（仲哀紀八年）

これは、岩波古典大系本の訓みであるが、原文「向津国」の返り点がなければ「向つ国」である。時代別国語大辞典の「ムカ」の項は「向津国」と訓んでいる。最近の中央公論社の日本書紀は「日本の津に向いている」と訳している。（日本の）津に向へる国の意のムカツ国であろう。そのムカツ国は、日本に勝って輝くばかりの金、銀、彩色のあふれる宝の国だという。新羅が憧れの国であったことは、出雲風土記意宇郡の国引き物語でも分かる。新羅の国の余りの地を引いてくるというのは、新羅の価値を認めているからである。また、逸文播磨国には、息長帯日女命が新羅国を平定しようとする時の、神託が記されている。

好く我がみ前を治め奉らば、我ここに善き験を出して、ひひら木の八尋梓根底附かぬ国、越売の眉引きの国、玉匣かがやく国、苦枕宝ある国、白衾新羅の国を、丹浪以ちて平伏け賜ひなむ

新羅に対する賞讃のコトバが連ねられている。そのような国だから、息長帯日女命は平定の意欲をもつのであろう。ムカツ国である新羅は、宝のあふれた美しく豊かな国なのである。ムカには「正」「聖」の内容とともに、「幸」の内容も含まれているように思われる。ムカを語基とするムカヒ、その音便化したムコウという方が、今も人々の憧れをかきたてるのは、始原において、ムカがこのような内容を含んでいたからなのであった。

へムカサクル

ムカを語基とする動詞で、唯一の例であるムカサクルを少し検討したい。

韓国を 如何に言ことそ 目頼子来る むかさくる 杵岐の渡を 目頼子来る (継体紀二十四年)

この歌謡について、土橋寛氏は、「向離る」の意味を

『厚顔抄』『落葉』『言別』が杵岐と任那とが向かいながら遠ざかっている意と解したのは、任那の人々の歌という点からいえばもっともであるが、これを任那の人々に仮託した時人の歌的なものとする、実際の作者は物語述作者であるから、大和を基準にして遠くに隔たった杵岐の渡りという意味に解すべきであらう。その場合の「向」は、「天雲の向伏す極み(万・八〇〇)」と同様、遠方の意に解される

と述べているが、前半は賛成できるが後半には異議がある。ムカは

遠方の意味ではなく、尊い天子のいます朝廷がある方位なのである。その朝廷を遠く隔たった杵岐を通して、さらに遠い韓国にやってきたことを難ずるのは、韓国に滞留久しく苦勞している在韓日本人の、大和朝廷尊崇から来る目頼子同情の歌ではないのだろうか。ムカは呪力を発現するところだから、そこを離れることは、目頼子を守っていた呪力の効果も薄れることになるのだ。ムカは、もともと遠方という意味ではなくて、尊いところという意味なのである。

(2) ムク・ムカフ・ムキアフ

へムク

ムカヒメの項で、ムカヒメと称呼すること自体に、服従の意味がこめられるということを述べたが、動詞と分類されるムクも検討しなければならぬ。

自動詞四段活用としてのムクは、あちら側(いわゆるムカヒ側)に対して恭順の意を示す行為であり、それを示すコトバである。日本霊異記下巻に

泊瀬の上の山寺に登り、十一面観音菩薩に参め向く

とある。十一面観音に対する尊敬の念がムクという行為をとらせるのである。

へムカフ・ムキアフ

ムカフはムクに延言のフがついた形で、ムク状態の継続を意味している。ムカフは「向かう。ある方向に面する。」の意味の他に、「敵対する。はむかう。」意味もあるが、もともとは「向ク(四段)の連用形向キアフの約」(時代別国語大辞典)とあるように、対等なもの同士が互いにムクことで、一方が他方をムケる(つまり服従させる)まで、相対するということであらう。四段動詞が下二段

に活用される時、使役の意味を含むようになる一類があると、佐伯梅友氏は指摘されている。<sup>(3)</sup>

尾張に 直に向かへる 尾津の埴なる 一つ松 あせを 一つ松 人にありせば 大刀佩けましを 衣着せましを 一つ松 あせを (古事記中)

小学館古典全集古事記の注や『古代歌謡全注釈』は、物語に即してみれば「尾張」は、美夜受比売の住む年魚市の県であるが、所伝を離れては、単に尾張の国に向かい合っているにすぎない、と注記しているが、所伝を離れても、熱田神宮のある尾張は、尾津の埴より上位に位置するのである。同想のものが日本霊異記下巻にもある。

大宮に 直に向かへる 山部の坂 痛くな践みそ 土には有りとも

これはワザウタらしきもので、「大宮」は藤原宮、「直に向かへる山部の坂」は山部親王、すなわち桓武天皇雌伏の時の名であり、将来、天皇にもなるお方だから、ひどい扱いをしてはいけないの意である。藤原宮に向いているほど尊い、ということ、藤原宮の方が尊いのである。「尾津の埴」も「尾張」に向かっているゆえに愛しいので、だから、衣を着せたいのである。

①泉津日狭女、其の水を渡らむとする間に、伊奘諾尊、已に泉津平坂に至しましぬといふ。故便ち千人所引の磐石を以て、其の坂路を塞ひて、伊奘冉尊と相向きて立ちて、遂に絶妻之誓建す。(神代紀上)

②日神、素戔鳴尊と、天安河を隔てて、相對して乃ち誓約ひて曰はく、「汝若し奸賊ふ心有らざるものならば、汝が生めらむ子、

必ず男ならむ。如し男を生まば、子以て子として、天原を治らしめむ」とのたまふ。(神代紀上)

③時に八十万の神有り。皆目勝ちて相問ふこと得ず。故、特に天鈿女に勅して曰はく、「汝は是、目人に勝ちたる者なり。往きて問ふべし」とのたまふ。天鈿女、乃ち其の胸乳を露にかきいでて、裳帯を臍の下に抑れて、咲噓ひて向きて立つ。(神代紀下)

④是に綾糟等、懼然り恐懼みて、乃ち泊瀬の中流に下て、三諸岳に面ひて、水を敲りて盟ひて曰さく……(敏達紀十年)

①②③の記事には共通項がある。すなわち、「絶妻之誓」「誓約」という重大な行為の時にムキアフのである。相手を自分の意のままに従わせるには、ムキアい、そこから発する呪力の強さ、そして、コトバの呪力の強さによって、強い方が相手をムカせることになるのだ。③は、天照大神の命により、衢神に「目勝」する者として選ばれ、その衢神に相対する姿勢が、「咲噓ひて向きて立つ」ことなのである。この行為は、敵の呪力を解きほぐすことだと言われている。<sup>(4)</sup>ムクことと「咲噓」うことによって、相手を従わせるのである。④のムカうに「面ふ」があてであるが、これもムカフの一義である。「誓盟」の方法が、川に入って三輪山に向かつて、水をすすって誓うという手続きをとるのである。

このように、ムク・ムカフ・ムキアフは、重大な行為の際に取られる体勢であった。

## 二 山の靈性

やがて、ムカヒと抽象されるその以前の、ムカツ国はじめムカと

つくコトバの表わす所は、信仰と理想の地であった。そして、そこにムクということは、幸いを賜りたいとひれ伏して祈ることであり、ムカフは人間の力で成就させずにはおかぬという意志力がこもった意志力の感じられるコトバである。ムカツヲのムカにも、そのような意味がこめられている、と考えられる。では、ムカだけであるるか。ヲは単なる山の尾根の意味だけなのだろうか。

ヤマに神々がいたことは、風土記や記紀に枚挙の暇のないほど例がある。時に人間に災をなし、人間の禱告によってようやく高い山に住処を移したり（常陸国風土記久慈郡）、国つ神が天皇に助力を申し出たりしている（肥前国風土記高来郡）。一つだけ、古事記を例にあげたい。

天皇葛城山に登り幸でましし時、百官の人等、悉に紅き紐著けし青摺の衣服を給はりき。彼の時其の向へる山の尾より、山上に登る人有りき。既に天皇の鹵簿に等しく、亦其の装束の状、及人衆、相似て傾らざりき。  
（古事記下）

この天皇は雄略であり、「其の向へる山の尾」というのは、雄略にムカワレている山ということで、雄略がムカっている山に神がいたのである。神がムカヒの山の尾根に現れることは重要であり、雄略が相対する時、これも呪的な行為「望<sup>ホカ</sup>」りて問うのである。さしもの雄略も、神の前にはひれ伏したのであった。

万葉集には、山に神を見たと言歌は無い。わずかに、藤原宮の御井の歌（一・五二）の山讃めが、山を神の住処と尊崇する気持から歌われたのではないかと思われるのである。四方が瑞々しく清々しく、妙なる名の山であると讃めたたえ、そして、そういう山々に

囲まれた藤原宮だから、結局は一番尊いということになる。

そういう中で、ムカツヲを詠み込む歌が万葉集に散見する意味は何であろうか。

### 三 ムカツヲの歌

万葉集の他に、紀歌謡にムカツヲを詠んだものが一首認められる。

向つ嶺に 立てる夫らが 柔手こそ 我が手を取らめ 誰が裂手そもや 我が手取らすも  
（皇極紀三年六月）

皇極紀に、これは、猿の歌ったワザ歌とされていて、書紀の筆録者は「上宮の王等の、蘇我鞍作が為に、胆駒山に囲るる兆なり」と解説する。土橋寛氏は、「本来は歌垣に立った女の歌」で、「向つ峰に立てる夫ら」は「向つ峰の歌垣に立てる夫ら」のことで、「手を執る」ともども歌垣の歌詞であるという。筆者には、なぜ山上で歌垣が行われるのかに興味があるし、なぜ向つ嶺の男性なら「我が手」を取ってもいいのか、ということに関心がある。ムカヒメ・ムカツ国のムカの意味をあてはめれば、ムカツヲにしているのは手の届かない世界の若君という、古代的認識があるように思われる。「柔手」は「労働に縁のない領主階級の若殿の手」（土橋・前掲書）という。そのような人なら、私の手を執ってもよいが、だが、このゴツゴツした手なんか、という意味である。理想の男性は、近くにはいなくて、いつもムカツヲにいるものなのである。「向つ嶺に 立てる夫ら」の淵源には、神の姿があるのである。

①花散らふこの向つ嶺の平那の嶺の洲につくまで君が齢もがも

（十四—三四四八）

この歌を、多くの注釈書は、主讃めの歌であり、賀歌であるとしている。ムカツヲである乎那の嶺が崩れて土になるまで（つまり永遠に）、主君の長命を祈願している。国歌君が代と同想である。めでたい語句を用いているから賀歌なのではなくて、なぜ、めでたいコトバナのかである。「花散らふ」については以前に考えたことがあったが、桜の花が盛んに散る様子に、古代の人々は霊の働き——生命力の発動——を感受するがゆえに、寿句たり得るのである。そして、ムカツヲ。ムカヒの山は、神の住む聖なる場所であり、理想郷なのであった。そこにムキテ祈る（モガモの願望表現）ことよって、祈りが成就できると信じたところに、この歌が寿歌として成り立つ因があるのである。

②片岡のこの向つ峰に椎蒔かば今年の夏の蔭に比擬へむ

(七一—〇九九)

「片岡」は日本書紀に聖徳太子歌と伝えるものにも「片岡山」とあり、こちらは地名と思われるが、当該歌の「片岡」は「片斜面」で「向つ峰」と同格とされているが、地名と見ても悪くない。片岡山の一つの丘陵（おそらくそれは、東北に残る葉山信仰で端山と呼ばれるところのもの）を取り出して、「この向つ嶺」といつている。ムカツヲに椎を蒔くことで、実際には不可能な成長を招くことができることと信じたのであろう。椎を蒔くことによつてどのような意味があるのかは定かではないが、少くとも、その成長力から幻想される呪力を感じとったかと思われるのである。椎は、⑥と有間皇子歌（二・一四二）にしか詠まれていない。有間の「椎の葉」については、旅先であるからあり合せの食器代りであらうといわれているが、植物の生命力に延命を祈願する心が籠められていると、みることも可能で

あろう。当該歌は、ムカツヲに椎を蒔くことによつて木蔭ができるよう祈願する裏に、恋が実ることを寓意させており、恋愛の成就を祈願した歌である。

③向つ峰に立てる桃の樹成らめやと人そ耳言く汝が情ゆめ

(七一—三五六)

ムカツヲに立っている桃の樹に実はつけるのだからが——二人の恋愛が成就するのだから——とウタう前提に、すでに、ムカツヲに祈願したという背景が窺えるのである。他人に「この恋愛は成就するだろうか」とささやかれると呪力がとけるから、しっかり信じ合っていましたと、恋人が相手を励ます歌である。

④向つ岡の若楓の木下枝取り花待つい間に嘆きつるかも

(七一—三五九)

これも「向峰」に「若楓木」と植物の取合せで、若楓木は若い恋人を寓意しており、求婚しようとするのに恋人はまだ若すぎるといふ嘆きを詠んでいる。ムカツヲの木は理想の人の比喩となり、そこにムカッて、ひたすら、合歡の祈願をするのである。

⑤暇あらばなづさひ渡り向つ峰の桜の花も折らましものを

(九一—七五〇)

これは、高橋虫麻呂の歌であり、難儀なわざであつても川を渡つてムカツヲの桜を折ろうというのは、風流のわざなどではなく、桜の靈威を主人の身につけんがための行為である。「暇あれば」と仮定しなければならぬところに、信仰の衰退が認められるのだが、「折らましものを」という願望表現に、呪力への信仰が残存している。

⑥遅速も汝をこそ待ため向つ嶺の椎の小枝の逢ひは違はじ

(十四—三四九三)  
この歌にも椎が詠まれているが、ここは「椎の小枝」でいつか交差するもので、交差は逢うことに通じるのであり、「逢ひは違はじ」と強い願望表現になっている。一四二番歌の注釈に、飯を盛るには椎の葉は小さいから何枚か重ねた上に盛ったのだらう、という考察があるが、重ねて使うのは小さいからではなく、重なることで呪力が発現すると考えたのである。

⑦見渡せば向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛しき妻が妻  
(二十一—四三九七)

これは大伴家持の作であり、この歌については、唐風絵画の構図と見る注釈書も多いようである。卷十九の四一三九の樹下美人図に相似の構図もあるので。家持は記紀歌謡などを翻案して、自己の歌境を拡張しようとしているところもあるので、ムカツヲに立っている美女は、神つ代のムカヒメを頭に描いているのではないかと、みることも可能であろう。聖であり正である方位に神がいて、畏怖、尊崇の対象であったのが、やがて理想の人に変わっていくように、この美女と紀歌謡の柔手の若殿も、その始原は神なのであった。

⑧出でて見る向ひの岡に本繁く咲きたる花の成らずは止まじ  
(十一—一八九三)

これは「向いの岡」なのであるが、ムカヒの「小高い」ところに意味を認めるので、「向つ峰」と同列に扱う。これは純粹に向岡の呪力を詠み込んであり、花が咲いているとウタうことは靈力の発動が見えているのだ。その岡にムカって願いをかければ、必ず叶う、という強い期待が感じられる。「出でてみる」というのは、そういう呪的行為を始めようとの、意志的、意図的、儀礼的行為である。

ほかに、ムカヒの野辺を詠んだ歌がある。

見渡せば向ひの野辺の撫子の散らまく惜しも雨な降りそね  
(十一—一九七〇)

その「向いの野辺」は、「見渡せば」という儀礼的行為の中で選ばれた、「聖」なる地である。野辺の撫子が散ることを惜しむのは、散ればムカヒ側の呪力が衰えるからである。景の賞翫ということの淵源には、呪力の発動への祈願があったのである。①⑧は「峰」「岡」の高所に、古代の人々は神秘性を感じていたと思われるのであるが、野辺にも拡大されて詠まれることは、ムカヒの呪力の大ききによるのであろう。

以上、見てきたようにムカツヲを詠みこんだウタには、みな共通性がある。見渡して選んだ峯、そこには必ず植物があつて、願望表現が用いられているのである。ムカヒ側は聖なる方位であり、人間の願望を叶えてくれるところであつた。祈願する際、ムクという呪的な行為をする。また、こちら側の願望を必ずや叶えさせるという強い意欲は、やがて、相手を我が意のままに従わせんとして、ムキアフのである。犬飼公之氏は、「古代的思考が基本的にとらえていたむきは面むかう方位であり、「対面する方位が一つの整序されたものであり、一つの秩序ですらあつた」と、むくについて述べている。〈聖〉であり〈正〉である「むき」にムクこと、それは、古代の人々にとって、ムカヒ側の大きいなる呪力を呼び起し、此界の人間の願望をかなえるための儀礼的行為だつたと考えるのである。

#### 四 古代的思考の残映

ムカツヲをウタうことには、以上のような、古代的思考の揺曳が



あったのである。万葉集には他にムカフ行為を詠んだものがあり、それは、また、記紀とも相通ずる精神で結ばれている。

三諸の 神辺山に 立向ふ 三垣の山に 秋萩の 妻を枕かむ  
と 朝月夜 明けまく惜しみ あしひきの 山彦とよめ 呼び  
立て鳴くも (九一七六一)

「神辺山」は尊い山で、その神辺山にムカっていることが三垣の山の賞め詞になっている。古事記歌謡の「尾津の埦なる一つ松」と同想である。

ムカツラのウタは人が山にムカうのであるが、人が山にムカう行為の意味が、次の歌に明らかである。

わが背子と 手携りて 明け来れば 出で立ち向ひ 夕されば  
ふり放け見つつ 思い暢べ 見和ぎし山に 八峰には 霞た  
なびき 谿辺には 椿花咲き うら悲し 春し過ぐれば……  
(一九一四一七七 家持)

「わが背子」(池主)と家持が手を取り合つて出で立ち向つた二上山、何のためにムカフかといえ、ムカヒ見ることによつて、心が和ぐために、なのである。

これと同想ではないかと思われるものに、序として用いられる「大夫の(出で)立ち向ふ」がある。

大夫の 出で立ち向ふ 故郷の 神名備山に 明け来れば 柘  
のさ枝に 夕されば 小松が末に 里人の 聞き恋ふるまで  
山彦の 相響むまで 霍公鳥 妻恋すらし さ夜中に鳴く  
(十一一九三七 古歌集)

「大夫の 出で立ち向ふ」は、ふつう、「マト」を引き出すための序と見られているが、この歌などをみると、大夫が立ち向うの

は、単に弓を射るためではなく(この歌にはマトのつくコトバがない)、実際に、大夫は、いくさの前に山にムカうという行為があつたのではないだろうか。例歌の大夫が、なぜ、故郷の神名備山にわざわざ出で立ち向うのかといえ、神名備山の霊力をわが身に付着させ、その上で敵にムカうためなのではないだろうか。

ムキアフことは、もともと神と神との行為であつたが、万葉集になると、男女のムキアヒが歌われる。

向ひみて見れども飽かぬ吾妹子に立ちわかれ行かむたづき知らずも (四一六六五)

これは安倍朝臣虫麿の歌であるが、現代にも通じる別れの歌、と読めるし、読んでいいと思うが、ムカヒ居の淵源には、神と神との張りつめた緊張の対決の場面があつたのである。

天照らす 神の御代より 安の川 中に隔てて 向ひ立ち 袖  
振り交し 息の緒に 嘆かす子ら……  
(一八一四一二五 家持)

安の川に向ひ立ちて年の恋日長き子らが妻問の夜そ (同 四一二七)

安の川を中に隔ててムカヒ合つて立ち、袖を振り交わして相手の魂を招びこもうとしているのであり、これは、まさに、神々のムキアヒと同じである。神話を念頭においての作歌であろう。

古橋氏の『古代の恋愛生活』の中に「共寝に至る様式」が述べられていて、「女が床を整えて待ち、男が訪れ」た後、「たがいの袖を脱がし合う」行為が様式としてあつたと言われているが、相手を讃め合うのも、帯や袖を脱がし合うのも、ムキ合つてする行為である。結婚という神聖な行為には、ムキ合うという呪力を要する行為

が必要だったということであろう。ムキ合い、目をみつめ合う、というのは、いかにも恋人同士らしい行為であるけれども、みつめ合って相手の心をつかみ、こっちの思いを伝えようとするのは、神々の行為の記憶を揺曳するものであった。山の美しさを愛で、恋人と向き合い、目をみつめ合うという喜悦の行為も、その淵源は神と対面するためのそれであった。

ムカツヲも、単にムカヒ側にある山、という意味ではなく、ムカヒ側に感じられる靈力、それにムカフことによってわが身に付着させようという、呪的行為によって成り立っているコトバなのであった。

注(1) 宮城県や山形県、福島県、長野県に「ムカサル」「ムガサル」という「嫁入りする」意のコトバが残っている。その連用形名詞、「ムカサリ」その訛「ムカサレ」は「嫁入り」のことである。物類称呼は、「迎えらるゝのちどみたる詞なるべし」といい、大言海は「むかへ(迎)さり(去)ノ中略ニテ新婦ノ実家ヲ去リテ夫ノ家へ迎へラルル意ト言フ」とあるが、このムカヒとムカヒメは関係があるのではなからうか。宮城県に妻を「オカタ」その訛「オガダ」と呼ぶ習いが残っている。妻はムカヒメであり、オカタ様だったということではないか。

(2) 『古代歌謡全註釈・日本書紀』。

(3) 『万葉集品詞概説2』『万葉集講座』三卷 春陽堂。

(4) 岩波・日本古典文学大系『日本書紀』補注。

(5) 注(2)に同じ。

(6) 「花散らぶの発想」『萬葉研究』八号。

(7) 講談社文庫『万葉集』。

(8) 『萬葉集注釈』二卷。

(9) 「影の領界」『古代文学の変革』。